

薩摩治郎八とパリ国際大学都市（2）

—研究の現段階と人文学における「調査」の実際—

篠田 勝英

はじめに

2005年から2007年の三年間にわたり、学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）として、「両大戦間の在パリ日本人群像とフランス・モダニズムの展開」というテーマで共同研究を行ない（共同研究者：星埜守之、澤田直之）、一定の成果を上げ、その成果報告書に「薩摩治郎八と藤田嗣治——中間報告と今後の展望」と題した論考を寄せ、一区切りとした。この報告書は公開のものであるが、部数が限られていて参照が必ずしも容易ではないので、関連する諸分野の研究者による批判・検証に供するために、『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』の場を借りて、その増補・改訂版を発表することとした（報告書巻末に付けた写真資料は今回は掲載しないので、参照のための註記は削除してある）。

今回の共同研究におけるこれまでの国内外での現地調査に関しては、直接的な調査結果およびそれに基づく考察をすでに一部分発表しているので、本稿では活動の実際の記述と具体的方法論を中心とする。とくにパリ国際大学都市本部とフランス外務省外交資料庫における調査は人文科学系の研究者があまり足を踏み入れる場所ではないだけに、今後類似の調査を行なう学生・研究者があれば、ある程度参考になるのではないか、と思われる。また検証の終わっていない部分については近い将来における何らかの形で成果発表に俟つことになるが、その点に関してできる限り具体的な展望を提示することを試みる。

本稿の記述について若干の注意を促しておきたい。まず成果報告書に発表した「薩摩治郎八と藤田嗣治——中間報告と今後の展望」との異同を明確にするために、増補部分は各パラグラフの末尾に【付記】として記した。この「はじめに」は完全に差し替えたものである。なお記述にやや時事的な事実に関する記述があるが、それらはすべて2008年10月時点のものである。

大学都市本部および日本館での調査

パリ国際大学都市日本館の創設に関する資料は日本館にはほとんど存在せず、その大部分が大学都市本部資料室に保存されているので、2005年と2006年の二回にわたり、夏期休暇を利用して現地調査を行なった。

2005年9月には、当時の日本館館長、慶應大学教授牛場暁夫氏の仲介で、初めて大学都市本部資料室入室の許可を得て、日本館に関わる大量の資料を直接閲覧する機会に恵まれた。資料室は本部の建物地下（地形のせいで、大学都市正門の東にある小さな門から入ると、地上階に相当する）のかなり広い部屋で、大型書架が林立する。管理人に案内されて日本館に関する資料のある

場所を教わったが、一見したところ、これが意外に少ない。A4サイズの書類を収める厚さ10センチメートルほどのボール紙のフォルダー三つである。背表紙に52001という番号が記されているが、特に日本館を意味するコードではなく、整理番号と思われる。「一般文書」correspondance générale という標題になっているのは、各館と本部のやりとりの記録という意味であろうと思われる。三つのフォルダーを区別する番号等は記されていないが、1926 à 1949, 1950 à 1969, 1970 à 1981と年代順に区分してある。1982以降はおそらくまだ上階の事務所にあって、資料化されていないのであろうと推測したが、これは確認できていない。もっとも日本館創設に関する調査が今回の目的であるから、とりあえず1950以降の書類は脇に置くことにして、早速最初のフォルダーの中身に取りかかる。

開いてみて驚いたのは、書類の量である。かなり多くが航空書簡などに今でも使う薄手のオニオンスキン・ペーパーのような紙で、それらの大半が両面を使っている。しかもタイプライター印字の書類の多くはカーボン・コピーであり、オリジナルではない。私の知る限り、日本館にこの種の書類は保管されていないので、オリジナルの所在は不明である。しかし肉筆の書簡類もかなりたくさん目に付くので、その点では期待できると思われ、最初から目を通し始めた。

ところがその分量は紙の薄さもあって相当なものであり、内容を把握しながら重要と思われるものを選んでいては、一週間か十日ではとても全貌を捉えることが難しいことが判明した。そこで、利用できる時間と書類の枚数を勘案し、さいわいコピーは自由に取れることになっていたのので、1926 à 1949のフォルダー内の全書類を複写することにした。

これはかなり負担の大きい作業であった。案内された空間を「資料室」と形容したが、実は大学都市運営に関わる書類の印刷室でもあるらしく、大型コピー機の他に簡易印刷機もあり、専従の担当者が大量の書類を作成する作業の音量はかなり大きく、フランスの常で空調はなく、その中でひたすらコピーを取り続けるのは肉体的・精神的にかなり辛いものであった。またかなり神経を使わざるをえなかったのは、たたんだり、綴じてある資料が多く、これらを複写用に開いたり、綴じを外したりしたのちに元通りの状態に戻すという付随的な動作だった。さらに得られたコピーもつながりが失われないように綴じておく、という手順を取ったために、いわゆるコピー取りという作業の割には時間がかかり、最終的に三日半の時間を要した。こうして得られた成果は、両面コピーのできない機械だったせいもあり、元の書類の分量のほぼ四倍の40センチメートルの厚さに達した。

公文書に関しては、今のところ、後述の外交史料館の日本側の資料と付き合わせての確認作業が主であり、大きな成果を上げてはいないが、薩摩家からの資金提供と藤田嗣治への絵画注文に関して、何らかの新発見があることを期待している。

薩摩治郎八の自筆文書（主として書簡）は必ずしも読みやすい筆跡ではなく、文体としても外国人特有の癖や間違いも散見するが、フランス人留学生の協力を得て、転記が順調に進行している。この資料はおそらくこれまでまったく未調査であったと思われるので、新たな発見があるのではないかと期待される。しかしながら書簡のうちには日付のないものがかかなり多く、それらを時間軸に沿って並べることがきわめて困難となっている。複写がかかなり前に終わっているのに、検証に多大の時間を要しているのはそのためである。

翌2006年にも大学都市本部と日本館を訪れ、引き続き現地調査を行なった。今回はまず本部に

において写真資料の閲覧を願い出たが、担当者の休暇中で、助手格の人物ができる範囲で協力してくれたものの、ネガもポジもオリジナルを見ることができなかったのは非常に残念であった。しかしながら一部の写真資料は（おそらくスキニングにより）デジタル化されていて、そのすべてを提供してもらえたのはたいへんありがたかった。残念ながら解像度の非常に低い画像ファイルなので、印刷原稿には使うことができない。また画像自体にも新たな発見をもたらすような情報は含まれていない。しかしながら、いずれ日本館、大学都市について、何らかのメディアで紹介・説明する際には、視覚情報として十分活用できると思われる。その意味では大きな収穫が得られたのであった。

また日本館館長室においては、保管されている若干の未整理資料の網羅的な複写を行なった。すべて、筆者の館長職在任当時に所在を確認してあったが、将来このような形で研究対象にすることは考慮の外であったために、複写・検証に思い至らなかったものばかりである。創立記念式への招待に関わるものと、初期レジダンのリストが中心であった。

【付記】大学都市本部には相当量の写真資料が存在すると思われる。1999年の秋であったと記憶するが、館長室に本部から届けられる各種書類のなかに、日本館関連の写真のコピーおよそ30枚を綴じたものがあった。*Maison du Japon / Fonds d'archives photographiques de CitéCulture*（日本館／シテ・キュルチュール写真資料コレクション）と題されているだけで（CitéCultureは大学都市本部文化部の当時の名称）、一切の説明がないが、日本館設立当時のもの（定礎式、図面、内装、外観等）を中心として、アンドレ・オノラの日本旅行、関係者の肖像（薩摩治郎八、薩摩治兵衛、澁澤栄一、西園寺公望等）などが集められている。大学都市の「文化遺産」*patrimoines*ということがしきりに強調され始めた時期なので、その一環として本部所蔵の古い写真を館ごとに整理して、それを当該館に配布したものであろう。写真をコピー機で複写したものであるから、画質はかなり落ちるが、オリジナルははるかに良質であろうと想像される。また内容が網羅的ではなく、時期もバラバラであるを見ると、非常に多数の写真から恣意的に一定枚数を選んだ可能性も否定できない。その意味で、2006年に達成できなかった本部所蔵写真の徹底的な調査をぜひ行ないたいと考えている。

小林茂早稲田大学教授の御教示によれば、アンドレ・オノラ関連の資料は大学都市外の、おそらく国立公文書館 Archives Nationales に保管されているとのことである。薩摩はオノラに大量の書簡を送っているはずだから、貴重な情報が眠っている可能性はきわめて大きい。網羅的な調査が望まれるところである。また徳島県立美術館に寄託されている薩摩治郎八の遺品も、いまのところ網羅的な調査の対象とはなっていないようなので、いずれ徹底的な目録化を実施した上で、研究者の利用に供することになれば、さまざまな発見がなされることと期待される。

日本館入居者（居住者・一時滞在者）に関する記録は、戦前と戦後すぐの時期については網羅的ではないが、1960年代以降現在に至るまでのものは、おそらく遺漏なく日本館にも保管されている。ただしこれらはいわゆる個人情報であり、扱いには慎重であるべきであろう。

フランス外務省外交資料庫での調査

その年のパリにおける現地調査ではもう一箇所、フランス外務省外交資料庫（外務省本省内）Archives du Ministère des Affaires Étrangères（略称：AMAE）において資料閲覧を行なっ

た。目的は1921年から1927年まで駐日フランス大使の職にあった、劇作家・詩人ポール・クロードルと薩摩治郎八の関係を調べることである。この調査の結果は「薩摩治郎八とパリ国際大学都市日本館（1）ポール・クロードルの果たした役割」として発表し、原稿を以下に添付してあるので〔本稿では省略〕、そちらに譲り、ここでは AMAE における調査について簡単に述べておく。

お役所の資料庫というといかにも敷居が高そうだが、AMAE での資料閲覧には、特に利用資格はなく、誰でも入れる。もちろんそれなりの手続きは必要だが、入室許可証の申請は現地だけではなく、フランス外務省のホームページからも可能なので、外国人にとっては非常に便利である。ウェブ上で申込をすると、ただちに電子メールで返事が来て、その後郵便で確認の書類が届く。それを持って、ケ・ドルセの外務省に出向くというのが最初の段取りだが、外務省の建物はさすがにセキュリティ管理が厳しく、AMAE の資料閲覧希望者は随時入場することはできず、たしか30分ごとにグループにまとまって、係員の引率で省内を歩いて資料室にいたる。九月始めというのが閑散期か繁忙期か分からないが、作業をしているのはせいぜい十人程度で、部屋もさほど広くはない。BNF をはじめとする図書館とはかなり雰囲気の異なる場所だった。コンピューターの持ち込みは可能だが、コピーは部屋の隅にデスクを構える責任者の許可を得る必要がある。この責任者の裁量に任されている部分はかなり大きいように感じられたが、資料室利用の詳しいマニュアルがあるわけではないので、具体的に相談してみないとその範囲は分からない。それよりも AMAE 利用の問題点はふたつある。

ひとつは資料の分類法が分かりにくいこと。今回の調査の目的はポール・クロードル大使が本国の外務大臣に宛てた書簡のオリジナルを見ることと、その前後に書かれたかもしれない文書を探すことであったが、E583-1 sd という手書きの分類番号らしき記載のみの書簡コピーがどのように分類されているか、どうしても分からなかった。書類の受け渡しをする係員に聞いても埒があかなかったが、さいわい分類の専門家と覚しき人物を呼んでくれて、「大分類がE系列アジア・オセアニア1918-1940、文書目録E系列アジア、下位系列日本、その583-1の番号を持つ一連の文書」のうちのひとつであることが分かった（sd が sous-dossier の意味であることも教示された）。

ところが、これが第二の問題点なのだが、書類のオリジナルはここには存在せず、マイクロフィルムしかなかった。判読不能の箇所があるわけではないから、マイクロフィルムでも用は足りるのだが、前後にどのような書類があるか、用紙の形状はどのようなものか、といった補足的情報は存外貴重である。その点については、今回の調査では特に目的を設定してはいなかったのだが、マイクロフィルムの画質は必ずしも高くはないし、マイクロリーダーがネガ・ポジ両対応のものでなかったのもので、使い勝手は必ずしもよくはなかった。

オリジナルの所在に関して尋ねてみたところ、確定的な説明ではないが、おそらくナントにある AMAE の別室に保管されているのであろうとの回答を得た。資料保存は今後、別室が中心になっていくらしい。したがってオリジナルの閲覧にこだわる場合には、今のところネット検索等で資料の所在を確認できない以上、とりあえずパリの AMAE で調査を試み、目的が果たせない場合にはナントまで赴く用意をしておかなければならない。しかし一方では機密性の低い文書の場合には、ネット上での公開の可能性もある。実はこれは日本の外務省外交史料館がすでに行なっていることなのである。

【付記】フランス外務省の外交史料閲覧室は、パリ、ナント、コルマルの三箇所にあるが、2009年夏にパリ北郊ラ・クルヌーヴ La Courneuve に新たな外交史料センターが開館する予定であり、ケ・ドルセーの史料室・閲覧室は全面的に移転することになる。その準備のためにパリの閲覧室は2008年7月から閉じており、しばらくはナントとコルマルを利用するしかない。もっとも在外公館から本国に持ち帰った史料はもっぱらナントに集中しているようなので、オリジナルを参照する場合は、最初からナントに的を絞るやり方もありそうである。

いずれにしても外交史料の検索には高度のスキルが要求される。すでに分類番号の分かっている文書の閲覧はさほど難しくはないが、キ・ワード検索、あいまい検索は今のところ十分にはできないようなので、本格的な調査は十分な時間的余裕がないと困難であろう。

外務省外交史料館所蔵資料調査

パリ国際大学都市日本館に関わる主な資料が外交史料館で保存・公開されていることは研究者の間では周知のことであったが、その大部分がデジタル化され、ウェブ上で公開されていることは今回初めて知った。資料が置かれているのは、運営上ないし技術上の理由であろうと思われるが、アジア歴史資料センターのサーバーである。これらの資料のうち、何より重要なのは「在外日本学生会館関係雑件／巴里薩摩会館関係（日本会館）」という標題でまとめられた一連の文書だが、日本館創設時の諸事情を検討するには、開館した昭和四年（1929年）以前にさかのぼる必要がある。その際、貴重な情報を提供してくれるのは「外務省外交史料館＞外務省記録＞1門 政治＞3類 宣伝＞1項 帝国＞文化交換関係雑件／日仏関係ノ部」と分類されている、大正十年（1921年）頃からの文書である。従来、薩摩治郎八関連で日本館創設に言及するときには前者の資料にしか依拠していなかったと思われることが多いのだが、今回は後者を検証することで新たな知見が得られ、その成果を「薩摩治郎八とパリ国際大学都市日本館（1）」（白百合女子大学言語・文学研究センター『言語・文学研究論集』第7号所収）に採り入れることができた。しかし資料総体は膨大であり、今後の調査に俟つべき部分は大きい。現時点では消化し切れていない部分がかかり残っているが、さいわい関連書類のほぼすべてをダウンロード、プリントアウトしてあるので、随時参照が可能である。

いずれにせよ、この種の複雑かつ大量の資料をネット経由で手許に置いて、時間的な拘束を受けずに参照できることの意味ははかりしれないほど大きい。外国在住の研究者にとってはなおさらであろう。AMAEの資料もこのように参照できたら、と思わずにはいられないが、外交史料館の場合も所蔵資料のすべてがネット公開されているわけではないので、まずもって自分の求めている資料がデジタル化され、ウェブ上での公開の対象になっている幸運に感謝すべきであろう。

アジア歴史資料センターのサイトで閲覧・ダウンロードできる資料はDjVuというウェブ・ブラウザのプラグインを利用するフォーマットの画像ファイルであるが、このソフトウェアは非常に軽快に動作し、拡大・縮小が自在で、印刷も簡単にでき、たいへん便利である。Reelという分類が使われているところをみると、文書を直接スキャンしたものではなく、マイクロフィルムから起こしたものであろうと思われるが、画像の品質もよく、かなりの拡大に耐えるので、画質のせいで読めない部分には今のところ遭遇していない。使いにくいところがあるとすれば、

多くの文書が見開きを一頁にしているので、A3判にプリントアウトしないと、字が細かすぎて読みにくいことである。しかしこれはモニターの拡大画面で閲覧するのを主にすれば問題にならない。また個々のファイルにはかなり細かいインデックスが付与されていると覚しく、キーワード検索が一定の有効性を持っている。

もちろんデジタル化を行なうのであれば、テキスト・ファイルとなっていて、全文検索のできるものが何より望ましく、テキスト・データを含むPDF書類であれば申し分ないのだが、今後作成する文書なら容易に実現できても、過去の膨大な資産をテキストとして読み込む作業は気の遠くなるほどの規模になり、現実的とはいえない。しかし作業の対象が今より増えることはないのであるから、その可能性は検討されて然るべきであろうと、一研究者、利用者として考える次第である。

【付記】外交史料館の史料が網羅的に電子化されている、つまり漏れがない、という前提に立つことができるならば、現時点でも大正末から昭和初めの時期の日仏関係について、さらに具体的にパリ国際大学都市構想について、相当なところまでアジア歴史資料センターのサイトにアップされた史料で突きとめられそうである。しかしそれだけでも相当な規模であり、残念ながら史料を精査した総合的な研究は未だなされていない。

技術的な問題のみに限っていえば、ディスプレイ上での史料閲覧は、作業の種類によってはきわめて難しい。全体をプリントアウトすることも考えられるが、読みやすい大きさまで拡大した、A3判のプリントアウトは大きすぎて使いにくい。余白が広いのだから、コンピューター上でレイアウトだけでも加工ができるといいのだが、PDF版ではないので、困難であるように思われる。

資料保存に伴う諸問題

資料のデジタル化の問題が出てきたので、ここで語の本来の意味での「アーカイヴ Archive」のあり方について触れておく。

一般にヨーロッパの国々では、あらゆる書類がきちんと保存されていて、時代を経て貴重な史料となり、歴史研究に貢献しているという通念がある。これはおおむね事実であるが「きちんと」の内容は問題にせざるを得ない。すなわち、「遺漏なく残す」という方針は貫かれているが、分類は必ずしも徹底的には行なわれず、かなり大きなフォルダーのレベルに留め、とにかくその中にすべてを放り込んでおく、というやり方である。もちろんその際に何らかのコード化が行なわれるのが常だが、そのコード化の説明が行なわれない、あるいは失われているケースがまま見られるのである。

実際に遭遇するケースとしては、かなり多くの文書が同じコードを付与されているが、下位分類がなされていなかったり、通し番号がなかったり、という具合で、書物と異なり、時には紙片一枚のみの時もある文書資料の場合には、配列の順が狂いがちである。マイクロフィルム化されている場合は順序が狂うことはないし、コマごとに番号がついているのがふつうだが、今度はひとつの文書がどのコマからどのコマまでか、という点が明示的に示されないことが多く、ひとつのリールの全貌を頭に入れるのに苦労する。内容一覧があればありがたいが、これは巨大な文書になってしまうだろう。結局どちらの場合も、閲覧者が手探りで整理しながら探すという形にな

りやすい。求めている史料に行き着くまでには、経験的に身に着けるしかないある種の技術が必要なのである。

AMAEはそれでも分類の原則があり、文書すべてに(意味は分かりにくい)個別のコードが付いているが、大学都市本部資料室の資料はすべての紙葉に、それを入れたフォルダー番号が書き込まれているだけなので、取り扱いには注意が必要である。コピーを取ったのちにも一度順番が狂うと大混乱を呈するので、書類ごとにホッチキスで綴じ、フォルダーに収められた順に通し番号を付けた。しかしシステムティックなやり方でフォルダーに入れたとは思えないので、いずれ全面的に見直す必要がある。その際、日付のない書類・書簡はとりわけ慎重に扱わなければならない。なお現場におけるこの種の作業の際、撮影禁止でない場合には、デジタル・カメラ(解像度と撮像素子の大きさの点で一眼レフが望ましい)がいわば携帯スキャナーとして非常に有用であったことを付言する。

【付記】デジタル・アーカイヴの場合は、とにかくデータをファイルの形でフォルダーに放り込んでおけば、物理的な大きさをほとんど気にする必要がないので、散逸は防げるし、閲覧も容易だが、データが増えるにしたがって希望のデータにたどり着くまでの手間と時間が幾何級数的に増大するのは、通常のアーカイヴと同様である。しかし電子情報の場合は、ファイル名の付け方を工夫したり(分類記号、連番等)、インデックス化を行なうことにより、検索の速度と精度を飛躍的に上げることが可能になる。ただしそのためには、ファイル名、インデックスの形式を慎重に考えておく必要がある。もちろん途中で変更することも可能ではあるが、汎用性のあるアーカイヴであれば、利用者が複数になることを考慮する必要があり、変更は極力避けるべきであろう。

藤田嗣治関連

上記の一連の調査は薩摩治郎八関連のものが中心であったので、以下に藤田嗣治に関わる活動・調査について記す。

2006年6月10日と11日の両日にわたり、国際シンポジウム「パリ・1920年代・藤田嗣治」(京都国立近代美術館、京都造形芸術大学・比較藝術学研究センター、日本経済新聞社共催)が開かれた。これは特に両大戦間の藤田嗣治の画業を中心として、時代背景、技法、表現の問題などを多角的に捉えることを目指す企画であり、特に2000年に日本館で行なわれた藤田絵画修復事業の実行委員会会長高階秀爾氏(倉敷大原美術館館長)をオーガナイザーとして、現地での修復作業に参加した修復家、研究者による発表をも含む、意欲的なシンポジウムであった。

修復の技術的側面に関する発表はきわめて専門性の高いものであり、薩摩と藤田の関係を解明するのに直接役立つものが提供されることは期待できないが、日本館所蔵絵画の藤田の画業における位置づけ、同時期の作品との関連等に関しては裨益するところ大であり、聴衆のひとりとして参加しただけであるが、多くの点で示唆的かつ刺激的な企画であった。

この年は生誕120年を記念した本格的な「藤田嗣治展」が東京・京都・広島で開かれ、画家に対する関心が一気に高まったこともあり、杉並区立図書館と白百合女子大学言語・文学研究センター共催で行なわれる公開講座「知の散歩道」の一環として「パリ国際大学都市―日本館の75年 薩摩治郎八と藤田嗣治」と題した講演を行なった。大学都市と日本館の沿革、日本館創設に

おける薩摩家の寄与、薩摩と藤田の微妙な関係等をまとめたものであり、特に専門的な内容ではなかったが、藤田絵画修復事業に携わった経験を写真とともに提示したことが聴衆の興味をもっとも喚起したように思われた。その際、藤田嗣治、薩摩治郎八それぞれの血縁の方々の知遇を得ることができたのは望外の幸運であった。

薩摩家のおひとりとは、その後薩摩治郎八の研究者でもある早稲田大学教授小林茂氏の御厚意により、薩摩家の菩提寺、杉並の真盛寺を共に訪れる機会を得た。薩摩治郎八の墓所は未亡人の故郷徳島にあるが、日本館開設の陰の功労者ともいべき父親治兵衛の墓は真盛寺の広大な薩摩家墓所のなかにある。残念ながら住職が病臥中で直接お話を聞くことはできなかったが、過去帳の抜き書きのコピーを提供していただき、これまで未知であった薩摩家先代、先々代の家系がある程度明らかになった。治郎八に比べるとほとんど知られていない治兵衛の事蹟は、われわれの研究テーマにおいても多くの点に光をあててくれることが期待できる。当面、財政面での薩摩家の寄与を正確に秤量すること、その際藤田絵画にどの程度の額が費やされたかを確認すること等を検証するつもりであるが、その結果を通して、薩摩父子の物心両面における親子関係を明確にしたいと考えている。

薩摩治郎八については、上記小林茂教授が詳しい評伝を上梓する予定であり、在野の研究者、村上紀史郎氏の著作も刊行が決定したと聞く。また鹿島茂明治大学教授による「伝記」も雑誌連載中でいずれ書物の形を取ることであろう。藤田嗣治に関しては、先年藤田研究で学位を取得した近代日本美術史研究者、林洋子京都造形芸術大学準教授の力作『藤田嗣治 作品を開く』（名古屋大学出版会、2008）がついに刊行され、藤田研究に一時期を画すこととなった。これらの業績から汲むべきものは多い。先行著作から最大限の恩恵を披りつつ、未解読の薩摩治郎八自筆書簡・文書等の検証を中心に、薩摩と藤田の関係をさらに深く探っていく所存である。

【付記】エッソヌ県で発見され、修復の完了した藤田の大作を中心とする展覧会が、札幌の道立近代美術館（2008年8月）を皮切りに、全国五カ所（札幌、宇都宮、東京、福岡、仙台）で開催中である。このうち東京での開催を記念して、2008年12月6日に東京藝術大学において、「藤田嗣治の絵画技法に迫る：修復現場からの報告」と題した国際シンポジウムが開催された。これはエッソヌ県所蔵作品の修復にあたったフランス側専門家と、2000年の日本館所蔵の二作品修復に携わった日本人修復家の参加する大規模な企画で、2000年の修復事業の総括という側面ももつもので、藤田の絵画技法が中心となるシンポジウムだが、日本館設立時の状況、とりわけ薩摩治郎八と藤田嗣治の関係について、筆者も発表を行なった。